

2021年10月10日 主日礼拝

説教題「人知を超える神の平和」フィリピの信徒への手紙 4章 4～7節

主任牧師 加藤 誠

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」(フィリピの信徒への手紙 4章6-7節)

先週の礼拝では、礼拝とは神さまが私たち一人ひとりに「ぜひあなたも神の国の喜びの食卓と一緒にしてほしい！」と、イエス・キリストという僕（しもべ）を送って私たちに招待状を手渡し招いてくださっている場であることを聖書から聴きました。今朝は「その招きがどのような恵みの招きなのか」について、もう少し聴いていきたいと思えます。

主イエスが語られた「ぶどう園の労働者のたとえ話」において（マタイ 20章）、夕方わずか一時間しか働かなかった者が一日分の報酬である一デナリオン／銀貨一枚をもらった時、朝からまる一日働いた労働者たちは文句を言いました。「1時間しか働いていない者と12時間も働いた者とが同じ報酬であるのはおかしい」と。確かにそうです。私たち人間の社会では、報酬とは労働に対する対価です。1時間働いたら1時間分、12時間働いたら12時間分、働きに応じて与えられるもの。それが報酬です。

けれども、このたとえ話で主イエスは、神さまから私たち一人ひとりに注がれている愛は「報酬ではなく恵みであること」を教えられたのです。神さまのことをたくさん愛して、神さまのための働きをたくさんささげている者には、神さまから多く愛されて、神さまのことをなかなか大切にできず、隣り人のこともわずかししか愛せない貧しい者に対しては、神さまからわずかししか愛されないとすれば、それは「愛ではなく報酬」です。よく頑張った者はたくさん愛されて、わずかな働きしか出来ない者は少ししか愛されないとすれば、それは「恵みではなく報い」です。

ところが、神さまはほんとうに不思議な方で、信仰においても薄く、愛においてもほんとうに貧しい者、値なき者をも愛されるのです。それゆえに「ぶどう園の労働者のたとえ話」において「あいつはたった一時間しか働いていない者ですよ！」と非難されるような値なき者に神さまは愛を注がれ、恵みを与えようとされる。その不思議で、普通はありえない神さまの愛と恵みの招待を受けているのが、教会に招き集められている私たち一人ひとりなのです。今日、この礼拝に集っている者の中で「先週わたしはあんなにたくさん神を愛し、隣り人を愛したから、今日ここに招かれている」と胸を張れる人がどれだけいるのでしょうか。どんな時にも、神さまを信じて、神さまを愛し、隣り人を自分のように愛する。その点においてほんとうに貧しき者、神さまの招待を本来ならば受けられない者。神さまの招待を受ける資格のない一人ひとりが、今朝、ここに招かれているのではないのでしょうか。

「自分はほんとうにダメだなあ。なんて情けない信仰しか持ち合わせていないのだろう。貧しい愛しかあらかわせないのだろう」。そういう一人ひとりをそれでも愛

し、執り成して下さっている十字架の主。その主の恵みの招待状をいただいて、私たちは今朝、この教会に集められていることを覚えてほしいのです。

友松洋美さんが先週の月曜日に急逝されて、神さまの御許に召されたという知らせの前に、私たちは言葉を失いました。いつも笑顔で、元気に体を動かし、いろいろな方のお世話をさりげなく、さわやかにされる方でした。友松さんはあけぼの幼稚園に二人のお子さんが入園されたことがきっかけで聖書を手にするようになり、イエス・キリストの信仰に導かれました。ご主人が14年前に亡くなられたのですけれども、亡くなるまでの数年間の闘病を支えるために、友松さんが相当に苦勞されたことをお子さんたちから伺いました。でも、その苦勞を人前で嘆くことなく、笑顔が絶えることのない、いつものお母さんだったとも。一方で友松さんの愛唱聖句であったフィリピ4章6～7節を読み、また愛唱讃美歌であるという『人生の海の嵐に』の歌詞を読む時、友松さんは人前では決して苦勞を嘆くことはなくても、友松さんなりの嵐との戦いがあり、心の中にいろいろと去来する思いを、神さまにそのまま差し出して祈りながら歩まれたのではないかなあと、これはわたしの勝手な思いではありますが想像しました。

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」。私たちは、何でも心に求めるものを神さまに打ち明けていい。切実な願いも、戸惑いや不安、恐れも、何でも神さまにぶつけてよいのです。ただその時に「感謝をこめて祈りと願いをささげ」、私たちの切なる求めを何でも聞いて受け止めてくださる方が、まず私たちには注いでくださっている愛と恵みに感謝を込めて祈りなさいと使徒パウロは勧めています。その時、私たちの祈りは単なる願いごとの祈り、都合の良い時だけ神さまを利用しようとする祈りから、神さまの御心を尋ね求めながら、十字架の主と共に歩む祈りに変えられ、そこに人知を超えた神の平和が与えられていくのだと。きっと友松さんもこの愛唱聖句を口ずさみ、神さまの御心を尋ね求めながら十字架の主の伴いと導きをいただき、人知を超える神の平和に支えられて歩まれたのではないかと想像します。

それにしても、友松洋美さんとの突然のお別れをまだどう受け止めて良いのか、戸惑っている私たちがいます。命というものは私たちの手の中にはなく、ただただ造り主なる神さまの手の中にあること。一人ひとは神さまの時の御支配の中に生かされ、用いられている者であることを改めて深く示されています。今朝の週報の巻頭言に書かせていただいたように、桜の落ち葉のありようというのは、一枚一枚、形においても色合いにおいても、どれとして同じものはなく、ほんとうにそれぞれです。神さまの時を、今の時点では受け止めきれず理解しきれないとしても、しかし神さまが必ずその慈しみをはっきりと現わしてくださる時が来ることを信じて、友松さんをその御手に委ねていきたいのです。